

人生まさに起承転結

Accept What Comes

永田円了

今までのものを書いてきて、起承転結を気にかけてきたことは一度もない。たしか小学校の作文の時間にこのコトバを初めて耳にした記憶がある。漢詩の世界では定番になっているようであるが、今回は人生を生きる、成長しながら生きるツールとしてこの「起承転結」を捉えてみた。

何かことが起こる<起>、受け入れる<承>、意識が変わる<転>、そして新しい意識で行動する<結>、というように、人は出来事に対して、いったん心で受け止め、それを消化し、それから行動に移す、という過程を踏むことで成長し続けているのである。

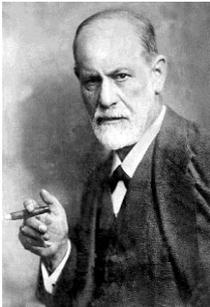
<承>が<転>に変わるとき

承が転に変わるためには、出来事<起>がどれくらい自分を揺り動かすものであるかによる。ただ楽しい出来事、ラッキーな事は、気分を高揚させるだけでインパクトは強いが、そこには学びの場は存在しない。出来事は、自分の今までの人生を覆すほどのものであればあるほど、<転>が大きくなる。これを英語圏ではパラダイム・シフト (Paradigm Shift) と呼ぶ。

三年前の東日本大震災で、会社も家も全て失った印刷会社社長 K さん、NHK のインタビューに答えて言った。「ああ、生きててよかった。すべてを失って何かスッキリした感じがする。今まで会社のこと、お金のことばかり考えていた自分におさらば、」と、すがすがし表情で語った。承から転に変わった人の姿は美しい。ここに人生の物語がもくもくと展開するのである。



イヤな出来事・逆境をどう捉える



精神分析学者

フロイト (1856-1939)

好ましい出来事、快適さばかりを求め、イヤな出来事には蓋をして人生を送るとどうなるのか。精神分析学者フロイトは次のように述べている。「全ての欲求を際限なく満たすことは、魅力的な生き方に見えるが、それは用心より楽しみを優先することを意味し、やがてその報いをうけることになる」。

振り返ってみるに、人生いい出来事ばかりとは限らない。いやほとんどが思い出したくないような不快な出来事だったかもしれない。シェクスピアのハムレットのセリフに、「To be or not to be. That is the question.」とある。

セリフは続く。「理不尽な運命に耐え忍ぶのと、剣を取って困難に立ち向かうのと、どちらが気高い生き方なのか？」と自問自答する。苦悶の結果、悲しい宿命をかかえ反発して生きるより、今ある人生を受け入れよう、と決意するのである。

イヤな出来事も、自分の中に受け入れたとき (承)、天はきっと私にそれを乗り越えるためのエネルギーと、意識変革のチャンスを受けてくれるものと、私は信じることにしている。逆境に悩み、そこから立ち上がってきた「転」は、自らの宝物のみならず、周りに同じ勇気と励ましを与えてくれるから。

<事例 DVD>

印刷会社社長 熊谷雅也 / ああ、生きててよかった
 認知症介護エキスパート 大谷のみ子 患者と、とことんつき合う (承)
 秀吉を義兄弟になって、ただ喜ぶ勤兵衛 / 快適な出来事からは何も学ばない
 石井重行 / 35歳で事故に遭う / なんだ、抜けねえだけじゃねえか! (承)
 メルギブソン: ハムレット / 今ある人生を受け入れよう
 米映画「ゲーム」、ヨハネ9章25節 私は盲目であったが、今は見える
 ホヤの研究 / スコフィールド博士 / 遠い異質を求めて
 鼓童 Meets 玉三郎 / 感受・浸透・反応
 歌・Hey Jude / 悲しい時には、悲しい歌を、

円了のホームページ: www.enryo.jp

